

# 方法としての有島武郎

## —「小さき者へ」をめぐる東アジア知識人の知的共鳴と思想的連帯—

丁 貴 連

### 序—有島武郎とアジア

かつて栗田廣美は、「有島武郎における『アジア』の欠落<sup>1</sup>」を指摘し、武郎が欠落させていたものは、現在の我々も欠落させている問題にはかならないと、武郎をめぐるアジア軽視の研究状況に修正を迫った。

それに対して、綾目広治は武郎自身にはアジアへの関心が希薄もしくはなかったとしても、アジアの方は武郎に対して積極的に視線を向けていたと指摘し、その代表的な例が魯迅であるという<sup>2</sup>。確かに、魯迅は武郎の文学をいち早く中国に翻訳紹介し、彼の訳した翻訳を通じて、武郎の文学と思想を読みだした文学者は少なくない<sup>3</sup>。それ故に、竹内好をはじめとする日中の研究者たちは魯迅と日本文学、とりわけ武郎との間の影響関係の解明に取り組んだ。その結果、魯迅は武郎の文学と思想をただ単に受容していただけではなく、武郎との間に多くの

問題意識を共有していたことが浮き彫りにされた。その詳細は綾目広治らの論文を参照されたいが、武郎に共感を寄せていたのが魯迅だけではなかったことは周知の事実である。

有島武郎研究会編『有島武郎事典』（2010）に掲載された金希貞「韓国（朝鮮）における有島武郎受容（A）」と奥村祐次「韓国（朝鮮）における有島武郎受容（B）」が如実に示しているように、武郎は1910年代から20年代にかけて日本に留学していた朝鮮の文学者、とりわけ韓国近代文学の成立に深くかかった金東仁や田榮澤、廉想渉らに多大な影響を与えた。それだけではなく、呉相淳、金祐鎮、朴錫胤、朴鐘和、羅蕙錫、柳道順、黃錫愚、方定煥、安懷南といった植民地期の朝鮮文化界をリードしていたエリート知識人たちも武郎の作品に共鳴し、その感動を朝鮮の読者と共有すべく翻訳を行なうなど、魯迅以上に武郎の文学と思想、そして晩年の知識人としての階級的苦悩に深い共感を寄せていたのである。

魯迅や金東仁たちが武郎の作品を読み始めた1910年代の日本文壇は、『白樺』（1910年4月）、『三田文学』（1910年5月）、『第二次新思潮』（1910年9月）、『青鞥』（1911年9月）といった同人誌を中心に活発な文学活動が行われていた時期である。しかしながら、魯迅や金東仁たちの関心と興味を強く惹きつけたのは白樺派であったといえよう。なぜなら、白樺派の唱える人道主義、理想主義、個人意志と価値への尊重、人間同士の相互理解、同情と愛の主張などが、1910年代後半から中国<sup>4</sup>と朝鮮で展開されていた新文化運動の主張と多くの面で

- 1 栗田廣美「有島武郎と岡倉天心・第一の序説—「有島武郎に於ける「アジアの欠落」を考えるための仮設提示」（『白梅学園短期大学教育・福祉センター研究年報』第4号、1999年11月）、「天心から有島へ—「アジア」と「中世」（『国文学』第50巻1号、2005年1月）。
- 2 綾目広治「アジアを巡る言説・アジアからの視線と有島武郎」（『有島武郎研究』第6号、2003年3月/のち『倫理的で政治的な批評—日本近代文学の批判的研究』皓星社、2004年所収）。
- 3 李雪「中国における日本近代文学の初期受容—翻訳集『現代日本小説集』（魯迅・周作人共訳）について」（日本比較文学会編『越境する言の葉—世界と出会う日本文学』彩流社、2011）によれば、1920年代に詩人として活躍した朱自清もその一人であった。彼は、1928年『小説月報』（第19巻第10号）に掲載された「児女」の中で、「ある時、有島武郎「小さき者へ」の訳文を読んで、あのような偉大で、深い態度に、私は思わず涙を流した」と武郎の作品に言及し、その作品世界に深く共鳴したと述べている。

一致していたからである。中でも、武郎の作品に描かれた子供への愛とその未来に対する期待、女性の置かれた立場への理解とその解放、そして社会的弱者や貧しい人々に寄せる同情のまなざしは、魯迅をはじめとする中国と朝鮮の新文化運動の旗手たちが追求してやまなかったテーマにほかならなかった。

そこで本稿では、1910年代の中国と朝鮮の知識人たちが愛読し、中国語と朝鮮語に翻訳発表された「小さき者へ」（1918）を手掛かりとして、「アジアの欠落」が指摘される武郎が東アジアの知識人たちと問題意識を共有していたことを浮き彫りにする。

## I. 白樺派の一同人から一躍人気作家へ

1907年4月、足掛け4年に及ぶアメリカ留学を終えて帰国した有島武郎は、三ヶ月間の軍務を経て同年12月、母校の東北帝国大学農科大学の英語講師に任ぜられ、以後1914年まで教壇に立った。アメリカ留学帰りの武郎への周囲の評価は高く、学生から篤い信頼と尊敬を受けていたことは無論、大学の外からも期待のまなざしが向けられた。武郎自身もそれに応ずるべく、教育活動を精力的に行なう傍ら、札幌独立基督教会の日曜学校長と学芸部長を引き受けていたばかりか遠友夜学校校長、社会主義研究会のリーダ、美術団体「黒百合会」の代表を次々と務めるなど社会的活動をも積極的に務めた。しかしその一方で、結婚早々「夫婦共に屡々離婚を真面目に考えた」ほど夫婦関係の危機を迎え、結婚生活への幻滅が強まるにつれ留学以降の冷めたキリスト教信仰への懐疑心から、札

幌独立教会の脱退を真剣に考えるなど、実生活の上では多くの悩みを抱えていた。

そうした時に、武郎はヨーロッパに留学中の弟壬生馬（後に生馬）を通じて志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦ら学習院の後輩たちと知り合った。しかも、彼らは単なる後輩ではなく、大正デモクラシーの自由な空気を背景に、自然主義一色に染まった文壇に新しい空気を入れようと学習院在学中から盛んに文学活動を行っていた若き文学志望者なのであった。同時代の日本の文学にはほとんど関心を示さず、「淋しい雪国の雪の中に埋もれて」忙しい教員生活を送っていた武郎は、既存の文壇の権威や道徳、思想に抵抗して新しい文学を生み出そうと文学活動にいそしむ若き後輩たちと親しく交流するにつれて、アメリカ留学時代の最後の一年間をワシントンの議会図書館で読書と文学研究に没頭していた頃を思い出さずにはいらなかったであろう。

1910年4月、武者小路を中心にそれまでの三つの回覧雑誌<sup>5</sup>を統合して新しい同人雑誌『白樺』が創刊されると、武郎は二人の弟とともに同人となって、創刊号に翻訳「西方万古」を寄せた。以後、「二つの道」（5月）、「老船長の幻覚」（7月）、「も一度『二つの道』」（8月）、「かんかん虫」（10月）、「反逆者ーロダンに関する考察」（11月）を次々と掲載し、遅ればせながら文学者としての道を歩みだした。しかし、武郎の創作やそれに対する評価は順調に進んだわけではなかった。これについては妻の安子が遺稿の中で、

あなたはご自身の真実の生活に飛び入らず

4 康鴻音「中国における有島武郎受容（『有島武郎事典』勉誠出版、2010）によれば、中国の翻訳史上白樺の作品が1919年5・4運動の前後に最も早くかつ最も多く翻訳され、反響も大きかった理由として、白樺派が唱えた主張が中国の五・四新文学の主張と多くの面で一致していたからだという。

5 『白樺』は学習院の同級であった武者小路実篤・志賀直哉・木下利玄らのグループと、有島生馬とその二年後輩の里美瑛・児島喜久雄らのグループ、そして一級下の柳宗悦・郡虎彦らのグループが作っていた三つの回覧雑誌『望屋』『麦』『桃園』が母体となって作られた同人雑誌である。

に遠慮してゐらつしやるのです。あまり人の為めばかりを思ひ過ぎなされる。親孝行の美しいあなたのご性質がそれを躊躇させてゐるのです。私はあなたのその御心を思ふ毎に泣きます<sup>6</sup>。

と指摘しているように、『白樺』に作品を掲載し始めた頃の武郎は、父への遠慮から本格的な創作活動を控えねばならなかった事実が浮び上がってくる。一方、武者小路や志賀直哉、長与善朗らの他の同人たちは無論、二人の弟たちは次々と文壇に認められ、作家としての地位を確立していた。文学者としての成功を願いつつも、父に気兼ねしてあと一步を踏み出せないでいた武郎が、中央文壇で華々しい活躍をしている弟たちを羨望のまなざしで見っていたことは想像に難くない。夫の焦りをよく分かっていた安子は、だからこそ遺稿の中で父の眼を意識しすぎる武郎の性質を気づかずにはいらなかったのであろう。

しかし、安子の願いも空しく、父の生存中の武郎は執筆活動を本格化することができなかった。彼にとって父、武はそれほど越えがたい存在なのであったが、その父は安子の死（1916年8月2日）後間もない11月頃に胃癌宣告を受け、わずか一カ月余りの12月5日に亡くなってしまったのである。気兼ねする対象がいなくなった武郎は、安子の遺志に答えるべく、父の葬式が済むや否や執筆活動を展開した。そして、早くも翌年2月に評論「ロダン先生の事」を『読売新聞』に発表したのを皮切りに、3月「ミレー礼賛」、5月「死とその前後」、6月「惜しみなく愛は奪ふ」（第一稿）、7月「カインの末裔」、8月「平凡人の言禍」、9月「クララの出家」、10月「凱旋」、11月「迷

路」、12月「岩野泡鳴氏に」を立て続けに発表した。その数なんと22編にも上る。

しかも、「死とその前後」をはじめとするこれらの作品は発表と同時に次々とメディアに取り上げられたばかりでなく、武郎にとって初の単行本となる『有島武郎著作集』第一輯『死』（初版千三百部）は発売二日目に売り切れて直ちに再版され、第二輯『宣言』（千部）も版を重ねる<sup>7</sup>という大人気ぶりであった。そんな武郎の出現を文壇も黙ってはおらず、中でも夏目漱石の門下生として、当時、新進気鋭の評論家であった江口渙は、

数多くの新進作家の中で現在最も華々しく活躍してゐるのは有島武郎氏である。そして同時に最も衆目の焦点になつてゐるのも有島武郎氏である。殊にその制作力の旺盛なる点に於いて、又作品の結構布置の堂々たる点に於いて氏は今や益々衆目注視の焦点となりつつある<sup>8</sup>。

と、武郎の復活を歓迎した。

武郎自身、この一年間をふり返って「嘗てない多作をした年」と題する感想を『新潮』12月号に寄稿し、それまで「公衆の評壇からは全く無視され度外視されてい」た自身の作品が「今年になって急に脚光」を浴びるようになったことに戸惑いの色を隠せなかった。しかし、同年12月2日に青山墓地で行われた安子納骨の際、武郎は記念すべき『有島武郎著作集』第一輯『死』を妻の墓に納め<sup>9</sup>、夫の成功を見ることができず寂しく死んでいった安子の無念を晴らそうとしたのであった。

6 有島武郎編・有島安子著『松むし』（私家版1916年9月）但し引用は『有島武郎全集別巻』（筑摩書房、1988年）による。326頁。

7 「有島武郎年譜」（『有島武郎全集別巻』筑摩書房、1988）150頁。

8 江口渙「有島武郎論」（『文章世界』1918年4月）但し引用は『有島武郎全集別巻』による。478頁。

9 「有島武郎年譜」（1988）151頁。

これらを見る限り、武郎が白樺派の一同人から文壇の中心にのし上がった現実を心から喜んでいたことは確かであるが、無論、人気作家になったことを手放しで喜んでいただけではない。今の人気がいつまでも続かないというジャーナリズムの厳しさを自覚すればするほど、武郎は『白樺』以来自分の作品を愛読してくれる「少数の読者」を大事にし、彼らのために作品を書きたいと決意せずにはいられなかったであろう。少し長いが、その決意を以下に紹介する。

私はある意味では随分迫られるやうなはめになつて、今年の四月に新公論に「死とその前後」を発表してから、私には嘗てない程の多作をしました。是といつて感想を書かしていたゞく程の事はありません。それは善悪共に作物が語つてゐると思ひます。（中略）

或雑誌の編集者は、私としては今が油の乗つた最中だから、油の切れない中にどしどし書かなくては行けないと云つてくれました。然し此位の油の乗り方では私は満足しない積りです。

私の作物はどう考へても広い需用を受け得べき性質のものではありません。来年あたりになつたら私の所謂評判も下火になると思つてゐます。その代わり少数の読者は私を捨てない事を私は知つてゐます。私はその人達に向つて書きます。だから私はゆくゝは「武郎著作集」のみで私のものは発表したいと思つてゐます。数を売らなければならない商売雑誌に迷惑をかけない為めにはさうするのが一番いい事だと思つてゐますから<sup>10</sup>。

このように、人気などに恋々とせず「少数の読者」のために書きたいという独自路線を宣言

した武郎は、1918年に入ってから執筆の手を緩めず、「小さき者へ」「生れ出づる悩み」「石にひしがれた雑草」といった新作を次々と発表する傍ら、著作集の刊行をも精力的に行なつた。これらの作品が文壇から高い評価を受けていたことは周知の事実である。とりわけ5冊の著作集、すなわち第三輯『カインの末裔』、第四輯『反逆者』、第五輯『迷路』、第六輯『生れ出づる悩み』、第七輯『小さき者へ』はいずれも10版以上の増刷を重ねるほど好評を博した。

## II. 『有島武郎著作集』の反響と自信

武郎は、自分の作品が一般読者、とりわけ若い世代の人々に好意的に迎えられていることがよほど嬉しかったらしく、ヨーロッパ周遊以来の友人マティルデ・ヘック宛に送った三通の書簡（原文は英語、小玉晃一訳）、すなわち1919年1月15日付と同年3月15日付、そして同年9月26日付の中で、文学活動に励んだ結果、7冊の書籍を出版することができ、それらは特に若い人々の間に評判が高く、自分に共鳴し支持してくれる読者が3万人もいると誇らしげに報告している。武郎が自分の文学的成功をどのように伝えていたのか、その一端を見てみよう。

僕の方はといえば、一生懸命文学の執筆の仕事をしています。すでに七冊が出版されており、それぞれが10版以上になりました。これは日本の本としてはまれな成功と言わなければなりません。これらの本を英語に翻訳し、ヨーロッパの人々の間にも読者を見出したいと願っています。この希望をいつの日か実現させるつもりです<sup>11</sup>。（1919年1月15日付）

10 有島武郎「嘗てない多作をした年」（『有島武郎全集第七巻』筑摩書房、1980）355頁。

11 「マティルデ・ヘック及び〔Circo Fujiyama〕宛書簡（譯）」（『有島武郎全集第十四巻』筑摩書房、1985）747頁。

さて、僕は今でも文学の創作に一生懸命励んでいます。僕の本（今までに七冊が出ました）は賞賛と励ましを受け、特に若い世代の人々に迎えられています。何冊かは約一万部売れました。これは日本の出版界ではむしろまれなことです。僕は同胞の役に立っていることを知ってたいへん喜んでいます。貴嬢にも読んでもらえたら<sup>12</sup>！（同年3月15日付）

僕の文学の仕事についてですが、僕は芸術的作品という形で自分の能力を引き出すために最善を尽くしています。そして本当に僕に共鳴し、僕を支持してくれる読者を得つつあります。すでに三万人くらいいるでしょうか。これはお国ではそれほど大した数ではないかもしれませんが。しかし日本の読書界ではかなりの数とみなされるのです。僕はこのような多くの読者をもって少しは仕事ができると思います<sup>13</sup>。（同年9月26日付）

一読してまず気付くのは、武郎は自分の書物が文壇は無論、一般読者の間にも広く読まれている様子を増刷回数（十版以上）や発行部数（約一万部）、読者数（三万人くらい）といった具体的なデータを使って報告していたことである。

『有島武郎著作集』が大正年間を通じていかにベストセラーかつロングセラーであったかを調査分析した山本芳明は、マティルデに書き送った武郎の手紙の内容が「しだいにオーバーな表現になっていく」としながらも、武郎が用いている発行部数や読者数は必ずしも根拠のない話ではないと次のように指摘している。

マティルデが日本に居住せず、日本人では

ないために、有島が思わず誇張や潤色をしている可能性もなきにしもあらずだが、例えば、『生れ出づる悩み』の場合、大正八年三月の時点で十七版、当時、増刷は一回につき五〇〇が慣例なので単純計算でいけば、「約一万部」発行されたことがわかる。また著作集を買ったであろう人を述べ人数で考えてみれば、「三万人くらい」という読者数も全くの無根拠というわけではないかもしれない<sup>14</sup>。

事実『有島武郎著作集』は、武郎自身が書簡<sup>15</sup>や日記<sup>16</sup>、さらに出版社の広告<sup>17</sup>などで詳しく報告しているように、第一輯（1917年6月発行）から好調な売れ行きを見せ、武郎没年の1923年までの6年間で少なくとも30万部発行されるという空前の大ヒットを記録し、「大正出版史の一つの語り草<sup>18</sup>」となった記念すべき作品集である。マティルデに三度にわたって自らの文学的成功を報告していた1919年当時の武郎は、第八輯『或る女（前編）』と第九輯『或る女（後編）』が上半期ベストセラー2位と3

14 山本芳明「有島武郎—＜市場社会＞の中の作家」（『文学者はつくられる』ひつじ書房、2000）258～259頁。

15 例えば、①『有島武郎著作集』第一輯『死』②第二輯『宣言』③第三輯『生れ出づる悩み』の売れ行きの状況については以下の書簡の中でそれぞれ明かされている。①吹田順助宛書簡（1917年6月21日付）「所謂景気は大分い、相です 第一版千三百冊は二日目に売り切れて今第二版に取か、つて居ます」②八木善次宛書簡（1917年10月22日付）「発売后三日で売れきれて今再販中です。こんな『ハ夢』にも思ひませんでした有難いようにも思ひます痒いような心持もします」③原久米太郎宛書簡（1919年9月18日付）「発刊後こ、一週間程三千部は出たさうだ」。

16 「Pocket Diary 1917」（12/12, 12/17）によれば、第二輯『宣言』は発行後すぐに初版1000部が売り切れたらしく、再版500部が発行されることになっている。

17 有島の死の直後に発行された1923年9月号の『新潮』広告欄は、新潮社版『有島武郎著作集』の版数を第一輯『死』74、第二輯『宣言』84、第三輯『カインの末裔』44、第四輯『反逆者』44、第五輯『迷路』62と伝えている。

18 瀬沼茂樹『ほんの百年史—ベストセラーの今昔』1965年9月）但し、引用は山本芳明による。275頁

12 同上747頁。

13 同上749頁。



位にランク入り<sup>19</sup>し、第一〇輯『三部曲』も下半期ベストセラー7位にランク入りするという、まさに「近時文壇の寵児トシテ数万の読者カラ敬慕サレル様ニナツ<sup>20</sup>」ていただけではなく、その思想性や道徳性の故に夏目漱石没後の後継者と見做され、漱石以上の人気を若い知識層の読者の間に獲得していた頃なのであった。

その自信が、海の向こうにいる心の友人に向けて、「これは日本の本としてはまれな成功と言わなければなりません。これらの本を英語に翻訳し、ヨーロッパの人々の間にも読者を見出したいと願っています。この希望をいつの日か実現させるつもりです」と、日本にとどまらずに欧米の人々の中にも読者を見出したいと、新たな意欲を表明させたのである。結局、その希望は叶わず、武郎の作品が英語圏をはじめとする欧米諸国の読書界に翻訳紹介されるようになったのは死後のことである。その詳細は杉淵洋一「フランスにおける有島武郎受容」とリース・モートン「欧米における有島武郎受容」（『有島武郎事典』2010）を参照されたい。

### Ⅲ. 「小さき者へ」を巡る東アジア知識人の思想的共鳴

#### 1. アジアからのまなざし

ところが、武郎のあずかり知らないところで『有島武郎著作集』は1910年代から20年代初頭にかけて中国や朝鮮から来日した留学生たちの間で熱心に読まれていた。それだけではなく、1919年頃から魯迅や周作人、金東仁といった東アジアの近代文学の成立に深くかかわる文学者たちの手によって、武郎の作品は中国と朝鮮文壇に翻訳紹介され始めたのである。しかし残念ながら、武郎は自身の作品が中国語や朝鮮語に

翻訳されていることをついに知ることなく、1923年6月9日、軽井沢の別荘で婦人記者波多野秋子と心中を遂げ、その生涯を終えた。そのせいもあろうが、武郎の生前中に中国語と朝鮮語に翻訳された作品はわずか5本（小説4編とエッセイ1編）しかなく、紹介された作品も『有島武郎著作集』第一輯『死』と第七輯『小さき者へ』に収録されたものに限られていた。以下は1919年から1936年まで中国と朝鮮で翻訳発表された武郎の作品とその翻訳者のリスト<sup>21</sup>である。

魯迅：「小さき者へ」（『新青年』1919年11月）部分訳と感想

金東仁：「死とその前後」（『曙光』1920年9月、全五場のうち第一場のみ翻訳）朝鮮語・部分訳

朴錫胤：「小さき者へ」（『創造』1921年1月）朝鮮語・完訳

周作人：「潮霧」（『東方雑誌』1922年1月）

魯迅：「お末の死」（周作人と共訳『現代日本小説集<sup>22</sup>』上海商務印書館、1923年6月）

魯迅：「小さき者へ」（同上）

周作人：「四つの事」（『東邦雑誌』1922年1月、後『現代日本小説集』に収録）

魯迅：「小児の寝顔」（『莽原』第12期1926年6月）

金溟若：「草の葉－ホイットマンに関する考察」（『奔流』第一卷五期、1928年）

魯迅：「芸術を生む胎」（『壁下訳叢』上

21 康鴻音「中国における有島武郎受容」（有島武郎研究会編『有島武郎事典』勉誠出版、2010）、工藤貴正『魯迅と西洋近代文芸思潮』汲古書院、2008）、相浦果ほか編集『魯迅全集』（学習研究社、1984）を参照。

22 『現代日本小説集』には他にも夏目漱石、森鷗外、菊池寛、芥川龍之介、江口煥（以上魯迅訳）、国木田独步、鈴木三重吉、武者小路実篤、長与善郎、江馬修、志賀直哉、千家元麿、佐藤春夫、加藤武雄（以上周作人訳）など、計16人の日本人作家の30編の短編小説が収録されている。

19 山本芳明（2000）255頁。

20 森本厚吉「重版自序」（『リビングストーン伝』第五版（1919年10月刊）但し引用は山本芳明（2000）による。275頁。

海北新書局、1929年）以下同

魯迅：「生命によつて書かれた文章」

魯迅：「ルベックとイリーネのその後」

魯迅：「イブセンの仕事振り」

魯迅：「芸術について思ふこと」

魯迅：「宣言一つ」

張我軍：「生活と文学」（北新書局、1929年）

緑蕉：『宣言』（啓智書局、1929年）

任白濤：『有島武郎論文集』（上海神州国光社、1933年）23編収録

任白濤：改訳『有島武郎随想集』（上海標点書局、1934年）

沈端先：『有島武郎集』（中華書局、1935年）『カインの末裔』『生れ出づる悩み』所収

任短濤：改訳『有島武郎随想集』（龍虎書店、1936年）

確かに、本格的な紹介が始まった矢先に自殺した影響は大きく、情死以降、中国と朝鮮では武郎の作品はしばらく翻訳されなかった。彼の作品が再び翻訳されるようになったのは情死事件から3年が過ぎた1926年であるが、そのスタートを切ったのはほかならぬ魯迅なのである。

魯迅は東アジアの文学者の中で初めて武郎の文学と思想を評価し、その普及に努めた文学者である。1919年11月『新青年』に「小さき者へ」を紹介してから1929年までの10年間、小説2編と評論6編、エッセイ1編の計9編の作品を中国文壇に翻訳紹介している。リストからも分かるように、1930年代に出版された単行本2本を除けば、戦前の東アジアで翻訳紹介された武郎文学の半数以上を魯迅が訳していたこととなる。この事実をもっと評価されてしかるべきだと思うのだが、注目しておきたいのは魯迅を武郎の文学と思想に導いた作品が1918年1月『新潮』に発表されたのち同年11月『有島武郎

著作集』第七輯に収録された「小さき者へ」だということである。

「小さき者へ」は、「死とその前後」（1917）と共に武郎の私生活に取材したいわゆる私小説風の作品である。ほかにも「An Incident」（1914）、「平凡人の手紙」（1917）、「小さな影」（1919）、「親子」（1923）などがこの系統に属する作品であるが、中でも「小さき者へ」は「一行のうそも書き加えられていない<sup>23</sup>」とされているように、病気で母を亡くした三人の幼い子供たちへあてた武郎の手記ともいえる小品である。

にもかかわらず、この作品は1918年に発表されてから日本は無論、魯迅をはじめとする東アジアの近代文学者たちに深い感銘を与え、現在でも日本や韓国、中国で読まれている。「小さき者へ」が言語や地域、時代を超えて人々に感銘を与えつづけているのはなぜか。

## 2. 魯迅の「小さき者へ」翻訳とその受容

1919年10月、「小さき者へ」を一読した魯迅は、直ちにその感想を書き上げて『新青年』（第六卷第六号、1919年11月）に寄稿した。その冒頭で彼は、「『われわれはどのように父親となるか』を書いた二日後に、『有島武郎著作集』の中で『小さき者へ』という小説をみて、いろいろよい言葉がたくさんあると思った<sup>24</sup>」と述べた後、その「よい」と思われる言葉を五箇所抜粋して『新青年』の読者に紹介した。少し長いですが、その箇所を原作から引用してみる。

「時はどん／＼移つて行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ない事だ。恐らく私が今こゝ

23 三上秀吉「解説（『小さき者へ』『生れ出づる悩み』岩波文庫、2015）128頁。

24 魯迅「随感録六十三『小さき者へ』」（増田渉訳『魯迅選集』第6巻、岩波書店（1986）55頁。

で、過ぎ去らうとする時代を嗤ひ憐れんでゐるやうに、お前たちも私の古臭い心持を嗤ひ憐れむのかも知れない。私はお前たちの爲めにさうあらん事を祈つてゐる。お前たちは遠慮なく私を踏台にして、高い遠い所に私を乗越えて進まなければ間違つてゐるのだ<sup>25</sup>。

(355頁) (下線は筆者、以下同)

「十分人世は淋しい。私たちは唯さういつて澄ましてゐる事が出来るだらうか。お前たちと私とは、血を味つた獣のやうに、愛を味つた。行かう、而して出来るだけ私たちの周囲を淋しさから救ふために働かう。私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふのではない。お前たちを愛する事を教へてくれたお前たちに私の要求するものは、たゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。(中略) 斃れた親を食ひ尽くして力を蓄へる獅子の子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨て、人生に乗り出して行くがいゝ。」(365頁)

「私の一生が如何に失敗であらうとも、又私が如何なる誘惑に打負けようとも、お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけの事だけはする。屹度する。お前たちは私の斃れた所から新しく歩み出さねばならないのだ。」(366頁)

「小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしまて人の世の旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。」(366頁)

「行け。勇んで。小さき者よ。」

(366頁)

引用から分かるように、魯迅が「小さき者へ」から読み取ったものは、「お前たちは遠慮なく私を踏台にして、高い遠い所に私を乗越えて進まなければ」ならないという「子供崇拜の思想<sup>26</sup>」に他ならない。

かつての中国社会では、目上の人、年長の者への絶対的な服従と礼儀こそが徳目とされ、子供の存在を強調することは長らくタブーであった。こうした考えは近代に入ってから衰えることなく依然として根強かった。しかし、1910年代に入ってから始まった五四新文化運動によって、儒教道徳や家族制度、さらには「孝」の概念が見直されて行くにつれ、子供は保護されるべき存在として認識されるようになってきた。つまり、子供を取り巻く抑圧な現実に対して大人たちが問題意識を持つようになったのだが、その代表が魯迅である。

魯迅は、儒教の「孝」による服従の論理こそ中国の進歩を妨げている要因に他ならないと考え<sup>27</sup>、小説『狂人日記』（『新青年』1918年4月）と評論「われわれは今日どのように父親となるか」（『新青年』1919年11月）などを通して、儒教のヒエラルキーから子供を解放せよと主張し、中国文壇を震撼させた。まさにその時、武郎の「小さき者へ」を読んだ魯迅は、その内容に驚愕した。なぜなら、「小さき者へ」の中で述べられていた主張が、二日前に書いた「われわれは今日どのように父親となるか」で述べた自分の主張と多くの点で共通していたからである。「小さき者へ」との比較の必要上、

25 有島武郎「小さき者へ」（『有島武郎全集第三巻』筑摩書房、1986）。

26 菊池寛「一月の文壇－新潮、新小説、異象、女学世界、三田文学、早稲田文学、文章世界」（『帝国文学』2月号、1918年2月）。

27 西原大輔「中国における子供の発見」（『比較文学研究』第62号、1992年3月）。



以下に魯迅の文章を抜粋引用する。

まず覚醒した人から手はじめに、めいめいでもって、自分の子供を解放して行くようにする外はない、ということになる。自分は因習の重荷をにない、暗黒の水門の扉を肩にささえて、かれらを広々とした光明の場所へ放してやり、今後、幸福な生活をおくれるよう、人間らしい人間として生きられるようにしてやるのである<sup>28</sup>。(111頁、下線は筆者、以下同)

とくに墮落しているのは、これを理由に報償を無理強いし、幼いもののすべては、親の犠牲となるのが当然と考えていることである。(115頁)

自然界は決して「恩」を用いないばかりか、かえって一種の天性を生物に与えている。われわれは、それを「愛」と呼んでいる。(116頁)

故に、私がいま自分で正しいと思っていることは、ただ「愛」だけである。

(117頁)

要するに、覚醒した父母は、完全に義務的で、利他的で、犠牲的でなければならないので、なかなか行い難いものであり、しかも中国ではことに行い難いものである。(126頁)

二人の文章を読み比べてみると、武郎と魯迅の考えが極めて類似していたことが分かる。こ

の両者を比較検討した山田敬三は、「偶然の結果ではあるが、この二人の文章は、まるで一枚の紙切れの裏と表の関係にある。魯迅が呼びかけ、有島が応えた、ちょうどそうした機能を、それぞれの作品が分け持っていた<sup>29</sup>」と摘指している。つまり、二人の間には単なる影響関係を超えて、思想的に問題意識を共有していたということが言えるが、このような眼差しは、韓国近代文学の父と言われる李光洙との間にも見られる。

### 3. 李光洙の「小さき者へ」受容

李光洙は、魯迅と同じく儒教が朝鮮社会の近代化を妨げる元凶だと考え、1910年半ば頃から儒教批判を展開<sup>30</sup>し、儒教的価値観にどっぷり漬かっていた朝鮮社会に対して変革を促した。中でも、第二次(1915年9月～1918年10月)留学中の1918年9月に発表された「子女中心論」では、「旧朝鮮の誤った道徳から新朝鮮の子女を救出する」ためには、「我々は(中略)必要ならば祖先の墳墓も暴き、父母の血肉も我々の食糧とせねばならぬ」と過激な主張をし、儒学者たちの強い反発を受けたことは周知の事実である。

これまで、「子女中心論」をめぐっては儒教の呪縛から子供を救うというそのテーマから魯迅の『狂人日記』(『新青年』1918年5月)とよく比較されてきた。確かに、両者の間には子供への愛とその未来に期待を託すという共通の認識が見受けられる。しかし、魯迅に衝撃を与えた「小さき者へ」の例からも分かるように、『狂人日記』以上に共通の問題意識が見られるのは、やはり「われわれは今日どのように父親となるか」である。以下の文は、魯迅によって引用された武郎の「小さき者へ」と魯迅の「わ

28 増田渉訳『魯迅選集第5巻』(岩波書店、1986)。

29 山田敬三「魯迅と『白樺派』の作家たち」(『九州大学文学論輯』第23号、1976年3月)後『魯迅の世界』(大修館、1977)に所収。

30 拙稿「啓蒙と文学の間で－韓国近代文学における子供の発見」(『宇都宮大学国際学部研究論集』第9号、2000年3月)。

れわれは今日どのように父親となるか」に対応するために李光洙の「子女中心論」から抜粋したものである。

子はそれ自体独立した個体であって、自身自身のために生まれたものである。それ故に子は決して親（といえども他の個体である）のために自己を犠牲にする義務はないし、親が子に犠牲になることを要求する権利もない<sup>31</sup>。（34頁、下線は著者、以下同）

あの蜘蛛類の母が自分の子供の餌になってしまうことは、まさにかくのごとき自然法則を示している。そしてまた、子が親から受けた恩を返す相手は、親ではなく自分の子である。子として親から受け取ったものを、今度は親として子に与えるのだ。（34頁）

旧朝鮮の誤った道徳から新朝鮮の子女を救出することは焦眉の急であり、同時にわが民族の将来長くにわたる運命の岐路である。（34頁）

子は決して親の所有物ではない。子自身のものであり、種族のものであるから、親は子に対して、親に対するような真心と、全種族に対するような敬意を表すべきである。（36頁）

我々の子に、我々を足蹴にさせよ。我々の肩を、彼らが高く登るための脚、踏み台にさせよ。我々の身体を、彼らが川を渡るのに必要な橋梁の材料とさせ、泥濘を埋める瓦礫とさせよ。我々の子が必要だと認めるなら、我々の骨を釜で煮て、機械を運転するのに用

いる油を作ってもよいし、蜘蛛の子のように我々を生きたまま頭から食べてもかまわない。（37～38頁）

ああ、子女よ、子女よ。お前たちこそは我らの中心であり、希望であり、喜びなのだ。（38頁）

李光洙の「子女中心論」を武郎と魯迅のものと読み比べてみると、その影響関係は一目瞭然である。まず、魯迅の「われわれは今日どのように父親となるか」と比較すると、両者はそれぞれの評論の中で、本来よき徳目であるはずの「孝」が国を亡ぼすまでに因習化された儒教倫理を厳しく批判し、孝による服従の論理が支配する「父祖中心」の社会から子供を解放して「子女中心」の新しい社会を作るためには「覚醒した」父母になるべきだと主張している。そして、子供たちが「栄光と幸福の生活を送れるように、我々は生前も死後も、心と力のすべをつくさねばならない。」（「子女中心論」）、「幸福な生活を送れるよう、人間らしい人間として生きられるようにしてやるのだ。」（「われわれは今日どのように父親となるか」）と、子供に愛と希望をたくしている。「偶然の結果」とはいえ、ここまで似てくるともはや影響関係をを超えているとしか言いようがない。

次に、武郎の「小さき者へ」と比較すると、李光洙との類似が見られる箇所は、魯迅が「よい」と思っていた箇所と重なっている。例えば、武郎が「お前たちは遠慮なく私を踏台にして、高い遠い所に私を乗越えて進まなければ間違つてゐるのだ」と述べると、李光洙は「我々の子に、我々を足蹴にさせよ。我々の肩を、彼らが高く登るための脚、踏み台にさせよ。」と書いている。また、武郎が「斃れた親を喰ひ尽して力を貯へる獅子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨て、人生に乗り出して行くがいゝ」

31 李光洙「子女中心論」（『青春』第15号、1918年9月）ただし、『李光洙全集第10巻』三三堂、1972）から引用。なお、本作品の翻訳は波多野節子氏の「子女中心論」を参照した。

と言うと、李光洙は「蜘蛛の子のように我々を生きたまま頭から食い尽くしてもかまわない。我々は全希望を子供にかけ、価値を置かねばならないのだ。」と書いている。内容と言い、表現と言い、もはや「偶然の結果」とは言えないほど両作品は酷似しているのである。

この作品が執筆された時期と環境を考慮すると、李光洙が「子女中心論」を執筆する際に武郎の「小さき者へ」から多くのヒントを得ていたことは間違いあるまい。当時、李光洙は早稲田大学の留学生として、学業のかたわら朝鮮社会の改革を促す執筆活動を積極的に行っていた。その際彼は、自分の考えや主張と一致するものを日本文学や日本語に訳された外国の作品を探し出して耽読し、それらと問題意識を共有しながら、自分の考えを深めていた<sup>32</sup>。李光洙の読書歴の詳細については波田野節子氏の『李光洙『無情』の研究－韓国啓蒙文学の光と影』（白帝社、2008）を参照されたいが、李光洙自身は「小さき者へ」をはじめとする武郎の作品に関しては一切の記録を残していなかった<sup>33</sup>が故に、両者の影響関係を軽々しく指摘するわけ

32 例えば、李光洙は「幼き友へ」（1917）と「少年の悲哀」（1917）を執筆する際に、強い影響を受けていた国木田独歩の作品の一部を日記（明治43年1月4日）に抜粋翻訳している。（拙著『媒介者としての国木田独歩－ヨーロッパから日本、そして朝鮮へ』翰林書房、2014）。また、「民族改造論」（『開闢』1922年5月）を執筆する際に、カル・ル・ボンの『民族心理学』の第四編「種族の心理的性格は如何にして変化するか」の第一章を抜粋翻訳して同年4月『開闢』に発表している。（南富鎮「ル・ボンの民族心理学の東アジアへの受容：李光洙・夏目漱石・鲁迅を中心に」『翻訳の文化／文化の翻訳』2014年3月）。

33 李光洙は、1933年1月『新東亜』創刊号に掲載された「星丘茶寮の文人雅会」の中で、1932年9月27日、日本文壇を代表する重鎮文人たち、すなわち菊池寛（欠席）、久米正彦、佐藤春夫、里美淳、斎藤茂吉と改造社長山本實彦、そして早稲田大学の恩師吉田絃二郎らと東京で食事会をした様子を紹介している。その際に彼は、里美淳について「里美淳氏は一見江戸子らしく目つきが鋭かった。里美氏は有島生馬氏と故有島武郎氏の弟として、『多情仏心』の作者である」と紹介している。これが有島武郎に関する唯一の記録である。

にはいかない。

しかしながら、これまで見てきたように、李光洙は儒教の呪縛から女と子供を解放する必要性を訴え続けてきた文学者である。その彼が、再デビューを果たしてから僅か一年で文壇の寵児に上り詰めた武郎が、自分と同様の主張をした作品を執筆し、それが文壇の注目を集めていることに無関心ではいられなかったであろう。次の文は、日本文壇の重鎮の一人である菊池寛が発表されたばかりの「小さき者へ」を『帝国文学』2月号の「一月の文壇」の中で批評したものである。

芸術活動の源を、愛に置く作者の芸術観が、その儘に具体化されたやうな作品である。若い時代を祝福する態度も立派である。小供を中心として生きて行つた主人公夫妻の愛に充ちた態度も、読む読者に敬虔な心を起させる。子供を親の爲に犠牲にせずして、親を子供の爲に、踏台にしようと云ふ子供崇拜の思想も、今の日本に必要な物の一つである。子供の一人――を、立派な人間として、尊重して行く所に、大なる人道主義の芽が潜んで居る。家庭で始るものは、独り慈善ばかりでない。此作者の新年の物の内では此作品が一番よい<sup>34</sup>。（下線は筆者）

菊池寛は、武郎の「小さき者へ」を、「親を子供の爲に踏台にしようと云ふ子供崇拜の思想」を書き表した作品であると高く評価し、この「子供崇拜の思想」は「今の日本に必要な物の一つである」と付け加えている。

李光洙が、この批評を読んでいたかどうかは定かではない。しかし、「子供崇拜の思想」、言い換えれば「子供中心」の思想は李光洙が求めてやまなかった思想に他ならない。その実現

34 菊池寛（1918年2月）。

のために執筆活動をしてきた李光洙は、自分の主張とあまりにも近いことが述べられている「小さき者へ」に衝撃を隠せなかったであろう。しかしそれよりも増して嬉しかったのは自分と同じことを考えていた同伴者を見つけたことに深い感動を覚えていたのではないだろうか。同様の思いは魯迅に対しても言えよう。

李光洙は魯迅との間では生涯面識はなく、無論、魯迅も彼のことは知らなかった。確かなのは、二人がまるで申し合わせたかのように、儒教のヒエラルキーから女と子供を解放すべきだと主張していたことだ。しかも、その関心から武郎の作品に出合い、自分たちと問題意識を共有していた強力な知己を得たことによって、自らの思想を深化させることができたことはもっと注目されてしかるべき事実だと思うのである。

(次号につづく)

【付記】本稿は、2017年度（平成29年度）科学研究費補助金（基盤研究C）「方法としての有島武郎－1920年代の朝鮮文壇における女性・子供・労働者の表象」（課題番号15K02239）の成果の一部である。

## 参考文献

- ・『有島武郎全集』（1980～1988）筑摩書房
- ・有島武郎研究会編（2010）『有島武郎事典』勉誠出版
- ・綾目浩治（2004）『倫理的で政治的な批評—日本近代文学の批判的研究』皓星社
- ・伊藤虎丸（1983）『魯迅と日本人—アジアの近代と「個」の思想』朝日新聞社
- ・栗田廣美（2011）『愛と革命・有島武郎の可能性』右文書院
- ・竹内好（1993）『日本とアジア』ちくま学芸文庫
- ・丁貴連（2014）『媒介者としての国木田独歩—ヨーロッパから日本、そして朝鮮へ』翰林書房
- ・波田野節子（2008）『李光洙『無情』の研究—韓国啓蒙文学の光と影』白帝社
- ・魯迅（1986）『増田涉訳魯迅選集』岩波書店
- ・山本芳明（2000）『文学者はつくられる』ひつじ書房
- ・山田敬三（1976）『魯迅の世界』大修館
- ・山田昭夫（1969）『近代作家叢書 有島武郎』明治書院